
猫的な何かの侵略

ナギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫的な何かの侵略

【Nコード】

N0796Z

【作者名】

ナギ

【あらすじ】

フツの社会人で、フツ過ぎる名前の私、鈴木ゆりは、ある日自宅の机の上にUFOを見つけた！？ そのUFOの中から出て来たのは…猫的な何かだった！？

これはその猫的な何かの侵略の記録である。

侵略開始

「はああ。つつかれたあ。」

私はその日、いつもと同じ様に仕事を終わらせ、いつもと同じ様に家に帰って来た。結構見栄張った立派なマンションです。

「さっさと風呂入っちゃおう」

ルンルンと靴を脱ぎ捨て、…そこで衝撃の光景を見た。

「あっ？リビングの電気消し忘れたあ。もう。」

今日の朝、バタバタしてたからなあ。

リビングの扉をバーンと開け…って「はっ？」

私は驚き、尻餅をついた。

小さなUFOがリビングの机の上に乗っています。

(※今では希望小売価格170円 税別 のヤツでは無いです。)

「えっ？何？何これ？」

よく見れば天井に小さな穴が空いていた。あのUFOがぴったりハマる位のが…ローンまだまだなんですけど。

プシュー

戸惑う私を待たずにUFOの下の部分がゆっくりと開いていく。

「にゃー。」

・ ・ ・

ソイツはペロペロキャンディーと思われるものを持って出てきた。

ペロペロ。

「あっああああいうえお。よしっ。」

マイクテスト的な何かをしてから猫的な何かは名乗った。

「我はニャンニャン星惑星探索又は侵略部隊隊長ニヤマルドだ。宜しく。」

ニヤマルドと名乗るソイツは三毛猫の姿をしていた。だが二本の足で立って更に喋った。これはオカシイ。

あっ、夢。これ夢よ。絶対そう。私疲れてるの。風呂はやめて早く寝よう。

「お休み。夢の宇宙人さん。いや、猫さん。」

私は夢にお別れを言って、夢の中に入ろうとベツトに向かった。

「待て。」

しつこい夢ねえ。私は足を止めない。

「聞け。」

嫌だあ。

「止まれ。」

無理。

「寝呆けているのか。なら…」

シュツ

「…痛つつつつ？」

ニヤマルドの爪は鋭い。身を持って実感しました。

ってか。

「何で痛覚あんのさ？夢でしょ？」

「紛れもない現実だ。」

「へっ？…ええええええええええ！？」

猫的な何かの侵略が始まった。

NYAN22強奪事件

「分かったか？」

「：はい。」

私は夜通しニヤマルドの説明を受け瀕死状態だ。でも収獲も多い。

ニヤマルドはニャンニャン星とかの侵略部隊みたいな猫で地球を探索しに来たらしい。それとあのペロペロキャンディーは、どら焼き好きの青い狸の便利なコンニャクのキャンディー版らしい。

「これからは此処を拠点として探索を始めて行く。しっかり協力を頼むぞ。」

「今なんと？」

私の聞き間違いでなければこのバカネコは此処に住むと言ったよね。しかも私に協力しろと。

「我に協力しろと言ったんだ。」
聞き間違いじゃないみたいです。

「そんな事しないわよ。私は毎日仕事仕事で忙しいの。」

「そうか。：ああ、もう面倒だ。侵略してしまおう。」
ニヤマルドがUFOの中に戻ろうとする。

「させないわよ？」
私は最近で一番の速さで動き、UFOを持ち上げた。

「にゃー？何をする？」
ニヤマルドがじたばたする。

「あんたが変な事しない様にコレは私が預かります。」

「引つかかれてもいいのか？」

ニヤマルドの爪がシャキンと伸びる。

うっ、怖い。

でも私にはコレがある。

「ニヤマルド。あんたが私を引っかいたらこのUFOなんか握り潰すわよ。」

「なっ？」

「分かった？」

「…はい。」

ニヤマルドがピシッと正座をしたままそう言う。よっぽど、大切なんだろう。

それより：

「可愛いわね。あんた。」

三毛猫の正座。めちやくちやキュート。

「可愛い？我が？人間は美的センスがオカシイ様だな（笑）」

「オカシくないわ。てか（笑）入れんな。」

人間以外で（笑）を使う生物がいるとは驚きだ。

「NYAN-22を返してもらうには何をすればいい？」

ニャン22？可愛い名前ね。壊す気が失せたのは内緒よ。

「そうね。取り敢えず掃除かしら？」

ニヤマルドが立ち上がる。怒っちゃったかな？

「了解した。人間、さっさと仕事に行け。」

ニヤマルドは真面目でお堅い性格らしい。

てか、名乗ってなかったわね、私。

「ニヤマルド。私は 人間 なんて名前じゃないわ。」

「なんと？ カマキリだったのか？」

「はひっ？」

「地球で言語を使えるのは人間とカマキリだけだと聞いたぞ。人間じゃないのならカマキリなのだろう。」

えっ？ カマキリって言語使ってた？ てか、何でカマキリ？ 反応に困る微妙な生物じゃん。

と驚いた後、説明を始めた。

「違うわよ。人間だけど名前はゆり、鈴木ゆり。」

この名前は嫌いだ。鈴木なんてありふれた苗字好きになれない。早く結婚して変えちゃおうと思ってても男縁が無いです。

なんて可哀想な私。

「可哀想だな。」

何で分かるの！？ この気持ち？ もしかしてニヤマルドもありふれてるのかな？

「それより、仕事は大丈夫なのか？ 結構、時間経ってるぞ？」

サッと振り返り時計を見る。

時計の針は二本とも上を向いていた。

「10時？ ヤバイ？」

この不況で職を失うと言うのは大変な事だ。

私は急いで支度をし駅へ走った。服は昨日のままだ。気付かれませんように。

この時、私は忘れていた。

掃除を頼んだ相手が宇宙から来た非常識人だと言う事を。

マタタビ権利条約

ガタンゴトンガタンゴトンと電車で揺られながら帰宅中の私です。
今の心境一めっちゃ不安。

ニヤマルドは地球人じゃない。まして地球猫でもない。猫的な何かだ。

掃除とか言って全て捨てられてたらどうしよう。

あつ？　なんか変なフラグつけてんじゃない、私。
ヤバイよ。

「うーん。どうしよう。」

つい、口に出してしまった。

「何、困ってんの？」

電車内で隣の人に話しかけられるというのはそりゃあ驚く。

「へっ？えっ？正樹？」

私の隣にいたのは99%正樹だった。

1%は正樹のクローンを考慮したから。

UFOが実在する様なこの世界だもの。何が起こっても驚かないわ。

「当たり前。大っきくなったねえ。ゆり。」

嫌味だ。正樹は190cmという日本人とは思えない巨人だ。

中学で小さかった私はいつも牛乳飲めよとかちゃんと寝てるかとか言われまくった。

「正樹って沖縄の実家に行ったんじゃない？」

正樹は高校に行かず、沖縄のさとうきび畑の実家を手伝いに行ったはずだ。

「いろいろ…あってな。」

いろいろって便利だなあ。凄い訊きづらい。てか訊けない。更に言

い方がカッコ良い。

「ふーん。」

もうすぐ、降りないとなあ。ちょっと残念。

「ゆりももう携帯持ってるだろ？コレ。」

正樹はポケットからカッコつけてメモ帳を取り、カッコつけて1枚破り、カッコつけて何かを書き、カッコつけて私に渡した。

予想というか確信を持ってソレを見ると案の定、数字が並んでいた。

「連絡してよ。じゃ。」

正樹はカッコつけてジャケットを直し、降りて行った。

「あんなカッコつけたったっけ？」

カッコ良かったけど。

「あんたさん。ああいうのはやめといたほうが良いよ。」

今日2度目の隣から話しかけられる私。

2度目の方はお婆さんだった。

「ああいうカッコつけはロクな男じゃない。」

お婆さんの言葉は説得力あるなあ。

「いえ、別にそんな気ありませんから。」

言っておきながら自信は無くなっていた。告白されたら断れないかもと。まああり得無いけどね。つくづく悲しくなるわ。

「なら良いんだけどねえ。」

お婆さんの目がキラリと光る。お婆さんて怖い。

「助言、有難うございました。」

よしっ。ナイスタイミング。降りる駅だ。

「頑張rinaさい。」

最後にそんな声が聞こえた気がした。

☆♪☆♪☆♪

「ふうう。落ち着こう。」

鍵を持つ手が震えている。

我が家はどうなっているだろうか？

「よしっ。」

勇気を出して：GO？

・ ・ ・

「おかえり。掃除だけでは申し訳なかったから快適化して置いたぞ。」

・ ・ ・

「どうした？具合でも悪いのか？」

・ ・ ・

「全く、人間はひ弱で困るな。」

・ ・ ・

「：ニヤマルド。」

「なんだ？」

「無駄なことはしないでって言ったじゃない？　なによ、これ。宇宙ステーション？　ていうか、デイベアのデイベアちゃんは何処よ？　何よ？　これで私が喜ぶと思った？　落ち着けないじゃない。意味不よ。大体、こんなにするための材料どうしたのよ？　この壁なんかめちゃくちゃ硬いじゃん。鉄じゃないでしょ。何？　新しい鉱物ですか？　私の部屋を研究者が喜ぶ様な感じにしないでよ？　まあ、このでっかいテレビはそのままでもいいけど…。他はちゃんと元に戻しなさい？」

「えっ？」

ニヤマルドがとぼけた仕草で言う。

「わかんないフリなていらないわよ。早く戻しなさい。」

ニヤマルドはようやく言われた意味が分かったと言う様にあたふたし始めた。

「申し訳ないそう思うとは思わなかったのだ。だが、頼む。一部屋でもいいから我に居場所をくれ。頼む。」

必死な形相でニヤマルドが言う。

てか、一部屋？　ウチはリビングとトイレ、寝室…だけですけど？

「そうだ？」

良いことを思い付いた。

「何だ？　何だ？」

ニヤマルドが興奮して尻尾をブンブン振る。思いつき猫じゃん。

「あなた、金、有る？」

「此処の金か？ いちよう、百万程作って来たが？」
来たあああああああ？

「ニヤマルド。その金、ちようだい？」

私なりに可愛く行ってみた。

「駄目だ。」

「何で？」

「この金はマタタビ用にするのだ。他の物には使えん。そもそもこの地球に來たのは視察、侵略、いろいろあるが本心を言えば、マタタビを買いに來たのだ。」

冗談拔きの顔でそう言う。

マタタビの為に百万？

これはまだ希望がある。

「ニヤマルド？ マタタビの相場って知ってる？」

まずは相手の知識を確認。

「よく知らん。百万あっても足りないのか？」

世間知らずが悪いんだ。そうだ。私は悪くない。

「うーん、足りないちゃー足りないけど私に任せてくれたらたんまり買ってこれるよ？」

ちよっと騙してるみたいで罪悪感、あったけど仕方が無い。

「何故、ゆりに任せれば安くなるのだ？」

ふふーん。理由もかんがえてありますよ。

「私の知り合いにマタタビの商売してる人がいてね。そのコネで安くしてもらえるの。」

実際、そんな人居ません。

「おおそうか。じゃあ頼もう。これだ。」

そう言うとうちの壁の一部をポチッと押した。

すると壁が割れ、中からアタッシュケースが出て來た。

ニヤマルドがぱかっと開ける。

「どうだ？」

自慢気に言うニヤマルド。
だが、ソレは…

「何時の時代のよ？」

時代劇の小判にそっくり。

「なにっ？これは違うのか？」

「ぜんぜん違うわよ。」

私の百万が…

「そんな…我のマタタビ…」

すごくかなしそうにニヤマルドが肩を落とし、言う。
物凄く可哀想だ。

「しょうがないわねえ。私が何とかしてあげるわ。」
本当はマタタビなんてそんなにしないもの。

「本当か？」

ニヤマルドが飛び上がり目を輝かせる。

「ええ。でも、その代わり…」

不安そうにニヤマルドが言う。

「何だ。」

私の目がキラリと光る。

「私の言う事聞いてもらおうわよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0796z/>

猫的な何かの侵略

2011年12月2日23時45分発行